

「青年とは、情熱と意欲を 持つ、すべての人」

「全国青年塾」塾頭 笹沢左保氏

プロフィール
昭和五年横浜市生まれ。
四十六年「木枯し紋次郎」で
木枯し紋次郎として一世を風靡する。

推理小説、時代小説など幅広い分野で活躍中の作家・笹沢左保さんが、宇城地方の地域づくり推進団体「宇城を考える会」会長（「熊本青年塾」塾長）米谷正勝さんの招きで来熊。県内各地域から、行政・民間の各分野で地域づくりを進めているリーダーたちが集まり交流会がもたれました。熊本へはよくお見えになる笹沢さん。



「日本一づくり運動」へも熱い期待を寄せておられます。ところで、今、新しい市民運動として注目をあびている「青年塾」——全国二百五十余の団体、四万人にも及ぶ塾生をかかえる「全国青年塾」の創始者で塾頭でもある笹沢さんにお話を伺いました。



先生と「青年塾」との出会い、塾をつくるきっかけは何だったのですか。

一言で言えば一冊の本ということになりましょうか。五年前、私の著作が二百冊を超えたとき、その記念に何か変わったものをと、私がこれまで考えていたことを長編メッセージとして世に問うたわけです。「明日は我が身」というタイトルですが、これが思いもかけずベストセラーになって、各方面からの反響がすごかったんです。そのなかの若い人たちが七十人ばかりが熱心に、とにかく一緒に行動しよう！と誕生したのが「青年塾」です。

「青年塾」にめめられている意味、先生が特に強調されたいことは何ですか。

「当たり前が通用する社会をつくらう」と言いたいんです。何か誤解されそうですが、思想にも政治にもいっさいかわりあいはありません。「青年」とは情熱と意欲を持つすべての人を意味し、「塾」とは日本全国が活動の場であると考えての命名です。——その「青年塾」も今や各県、各地域で活動が始まっていますが、その中心になるのは、リーダーということになるのではないかと思います。先生が考えられるリーダーの条件とはどういふものですか。

「先生と「青年塾」との出会い、塾をつくるきっかけは何だったのですか。」
「一言で言えば一冊の本ということになりましょうか。五年前、私の著作が二百冊を超えたとき、その記念に何か変わったものをと、私がこれまで考えていたことを長編メッセージとして世に問うたわけです。『明日は我が身』というタイトルですが、これが思いもかけずベストセラーになって、各方面からの反響がすごかったんです。そのなかの若い人たちが七十人ばかりが熱心に、とにかく一緒に行動しよう！と誕生したのが『青年塾』です。」

「最後に、笹沢左保という人として、先生にとって紋次郎とは。」
「あれは、半分自分自身です。そしてあとの半分は願望ですね。」

全国から 熱い視線！ 偉大なる田舎 への挑戦

私たちをとりまく、あらゆる今日的課題について、全国のモデルとなるような取り組みを、熊本の取り組みを中心に力強く地域づくりを進めること、これが熊本の取り組みの中心です。最近続けて掲載されましたので、ご紹介します。

熊本、秋田にみる 産業社会と都市づくり

「地方の時代」と言われても、経済政策の地方打撃が手ごたえがなくて、ほとんどの地方がもういっしょに沈んでしまっている。この五月には各自治体、O.A.機器を駆使して、自治体間の連携が高度化して、ミクロの精密な要求されるようになり、水も空気も汚れた既存の工業地帯では生産できなくなった。最先端技術が企業誘致の要諦である。電子機器メーカーはきれいな水と空気を求めて、地方に散っていった。地方に活気がみなぎるようになった。

「地方の時代」と言われても、経済政策の地方打撃が手ごたえがなくて、ほとんどの地方がもういっしょに沈んでしまっている。この五月には各自治体、O.A.機器を駆使して、自治体間の連携が高度化して、ミクロの精密な要求されるようになり、水も空気も汚れた既存の工業地帯では生産できなくなった。最先端技術が企業誘致の要諦である。電子機器メーカーはきれいな水と空気を求めて、地方に散っていった。地方に活気がみなぎるようになった。

数年間、全国を席巻したテクノポリス・ファイバー易摩擦、円高の影響で大手企業は「一斉に海外へ」移ったテクノポリス構想だが、その中で意外と善戦した熊本の仙台を訪ね、テクノポリス「優等生」の現場をレポートする。

「週刊東洋経済」8/9号
「熊本の仙台」
「逆風の中で頑張る」
「熊本の仙台」
「熊本の仙台」